

2022年5月1日 主日礼拝

説教題「ともし火は燭台の上に」ルカによる福音書 8章 16～18節

主任牧師 加藤 誠

「ともし火をともし、それを器で覆い隠したり、寝台の下に置いたりする人はいない。入ってくる人に光が見えるように、燭台の上に置く」(8章16節)

「ともし火のたとえ」(ルカ 8章) は、シンプルでありながら謎かけのような内容を含んでいる興味深いたとえです。まず第一に、ここで「ともし火」とは主イエスの福音のことでしょう。どんなに小さな光であったとしても、「ともし火」があるかないかではまったく世界は異なります。暗闇の世界は「ともし火」一つで「新しい世界」に変えられるからです。主イエスは「神の国の福音のともし火」を私たちのもとに携えてきてくださいました。「わたしがこの世界に携えてきたともし火／神の国の福音を、あなたたちはどのように受け取り、扱っているのか?」「せっかく受け取ったともし火を寝台の下に置くようなことをしていないか?」というのがこのたとえ話における主イエスの中心的問いかけではないかと思えます。

今年のイースターでは、復活の主イエスが私たちに手渡してくださった「希望の光」に焦点をあてました。暗闇に閉ざされた世界に生きている私たちに、主イエスは「神の国の光／希望の光」を届けてくださったのです。その「希望の光」と、今日のこのたとえで語られている「ともし火」とを重ねて考えてみるなら、「希望の光を受け取ったあなたがたは、その光をきちんと燭台の上に置いて部屋の中を照らしているか?」「まさか、せっかく受け取った希望の光を寝台の下に隠すようなことはしていないだろうね?」と、主イエスは問いかけておられるのです。

「神の国の光」「希望の光」は、一度受け取ったなら、あとは自動的に私たちの間で輝き続けているという、そうではありません。私たちの心の窓というものは、毎日、簡単にふさがってしまうからです。毎日、神さまの聖霊の働きかけをいただかないと、窓は簡単にふさがってしまい、私たちの心は霊的には暗いまま閉ざされてしまう。先週も紹介しましたが、信仰というものは腕時計のように一度腕にはめたらずっと付いているものではありません。毎日、「神さま、今日、頑ななわたしの心に窓を開けて、あなたの光を注ぎ、わたしに信仰を与えてください」と祈って、毎日新たにいただいでいかなければならないものだからです。そういう意味で、毎日、「ともし火」を燭台の上に置くことを意識的にしていかないと、せっかく受け取った「ともし火を器で覆い隠し、寝台の下に置いてしまう」ことになりかねないのです。

また、主イエスはここで「どう聞くべきかに注意しなさい」とも言われました。復活の主は十字架の主です。十字架の釘跡、そのままの方です。神さまが、主イエスの十字架と復活において、何を語られ、何を問いかけておられるか。どんなふう

に私たちのことを祈っておられるのか。一人ひとりが日々、新たに聴いていくことが肝要でしょう。私たちの信仰というものは、何かあればあつというまに吹けば飛ぶようなもので、毎日、神さまに新たに聴いていく。毎朝、新聞受けに新聞を取りに行くのと同じように、朝ごとに「神さま、聴かせてください」と尋ね求めていくことなしに、私たちの中に信仰は続かないことを知っておくべきだと思います。

昨年の新礼拝堂建築中、大井教会の聖書日課でエゼキエル書を読んでいるとき、「わたしは彼らのためにささやかな聖所となった」(11:16)の御言葉が心に響きました。バビロン捕囚でエルサレム神殿を失ったイスラエルの民は「これでもう神さまとのつながりが絶たれてしまった」と思い絶望しました。けれども神さまは彼らが捕え移された異国の地バビロンで「ささやかな聖所」となってくださり、彼らに伴い、彼らがいつでも礼拝できるようになってくださったのでした。私たちは今、立派な新礼拝堂をいただいているわけですがけれども、これはあくまでも建物、ボックスにすぎません。一人ひとりが日常の暮らしの中で「ささやかな聖所」となってくださった神さまを大切に受け取り、聖書を開き、祈る。その一人ひとりの「ささやかな聖所」を大切にする信仰があつて、はじめてこの新礼拝堂は「共なる礼拝の場所」として豊かに祝されるのです。そのためにも一人ひとりが日々「ささやかな聖所」を大切にしたいのです。

「持っている人は更に与えられ、持っていない人は持っていると思うものまでも取り上げられる」。神さまは「持っていない人」を大切に扱い、「与えて下さる」方なのではないか。どうして「持っていない人から、取り上げる」のか。私たちはどこか、神さまを「優しいだけ」の神さまにしてしまいがちですがけれども、神さまは私たちを正しい信仰に導くために、優しく、同時に厳しく問いかける方です。信仰は「求める者はさらに与えられ、求めようとしない者はさらに貧しくなっていく」世界です。それゆえ日々神さまに「求めて、戸を叩いて」いきたいのです。

そして最後に覚えないことは、「隠れているもので、あらわにならないものはなく、秘められたもので、公にならないものはない」ということ。ここで「隠れているもの」「秘められたもの」とは、主イエスの福音であり、「神の国の光／ともし火」のこと。神の国の「ともし火」は、イエス・キリストを通さないと見えてこない、隠された光です。けれども、この「ともし火」はどんなに人間が隠してしまおう、秘密のままにしておこうと考えても、そのような人間のたくらみを打ち破り、必ず人びとの前にあらわになり、公になっていく、そういう大きな力を秘めたものです。そういう意味では、私たちの信仰がどんなに未熟で拙いものであったとしても、神さまの「ともし火」は私たちの固い不信仰の殻を破っていく力を秘めているのです。

「リコンストラクション(再構築)」。私たちを壊し、私たちを新たに建て直してくれるのは、神さまの「ともし火」の力です。それゆえ、日々神さまの「ともし火」を求め、その「ともし火」を燭台の上に載せることを大切にしていきたいのです。